

放送授業と印刷教材の相互補完

—— 開発の目的と経緯 ——

多 田 方

1. 背景と目的

(1) 背 景

先進国であると発展途上国であるとを問わず、遠隔高等教育における主要な教授メディアは、印刷教材、映像・音声教材（テレビ、ラジオの他、ビデオ・オーディオカセットなど）、スクーリングの3種から成る。したがって、学生の学習意欲を刺激し、学習効果を高めるには、これら3種の教授メディアをいかに効果的に組み合わせうるかが、科目の主任講師にとって最優先の課題となるはずである。

ここでは、教師と学生、あるいは学生同士の人間的な触合いを主眼とするスクーリングは傍らにおき、他の2種の教材——印刷教材と放送教材——の相互関連について考察することとする。一般的に、多媒体教育において利用されるメディアは「相互補完」的であることが好ましいとされる。印刷・映像・音声といったメディアが、それぞれの有する特性を生かし、複合的に学習効果を高めるのが「相互補完」の意味内容であろう。こうした視点から、わが国でも放送大学の発足以前から、さまざまな形で調査・研究・開発が重ねられてきた。その主要な事例と問題点については、島田裕巳「放送大学における教材制作の考え方と印刷教材のあり方」（本報告書所収）の中で簡潔に整理・分析されているので、まず参照されたい。

諸外国の遠隔高等教育における主要な教授メディアは、ほとんど例外なく印刷された教材である（たとえば、B. Holmberg, *On the Status of Distance Education in the World in the 1980's*, 1985）、この場合、学習は印刷教材をベースに進められ、放送教材（テレビ、ラジオ、オーディオ・ビデオカセット等）は補完的な役割りをふられる。イギリス公開大学における印刷教材、放送教材をそれぞれの位置づけはその適例であり、後者の役割りは学習者に対する動機づけ、学習のペースメーカーといった程度に限定されている。そして、位置づけが限定されているので、かえって果たすべき機能が明確に整理・分類されているともいえる（たとえば、A. W. Bates, *The Role of Technology in Distance Education*, 1984）。

これに対してわが国放送大学の場合は、「（「放送」大学という）建前上も、現実の学習形態上も、放送の占めるウェイトがきわめて大きく（放送授業において印刷教材と放送教材とは均等にウェイトづけられる）、諸外国の例にみられるような印刷メディアを基本とする教材制作の枠組み（印刷→主、放送→従）をとりにくい。両種教材が均等にウェイトづけられていることが、かえって両者の相互関係・役割分担を難しくしているとさえいえる。この間の事情について、次のような記述がみられる。

「もともと、放送大学において印刷教材を活用することはディレンマを含む。一方で、もし印刷教材が放送教材の補完としてでなく研究され充実するならば、放送教材は補完的教材と

なり、莫大な先行投資を経て成立した放送教育の経緯の価値が減じられる。だから、この選択技は歴史的経緯が許さない。他方、もし放送教材が主たる教授メディアとして現在のように利用されていくなれば、原理的に音声メディアや映像メディアによる高等教育が可能なかどうか、また従来の印刷メディアに比べどのような価値をもっているのか、などの疑問に答えられるものでなければならない。しかし、これへの回答には質の高い研究や実験の継続を待たなければならない。」(白石克己「遠隔高等教育における印刷メディアの意義」1989)。

傾聴すべき原理的な問題提起であると思う。ほぼ同様な視点から、放送授業、印刷教材それぞれの機能、あるいは相互関係について、さらに実験的な試みが重ねられるべきだと考えた所以である。

(2) 目的

上記の視点に立って放送大学の新規開講科目を一つ選び、主として印刷教材の執筆・編集過程に参画しながら教材作成上の問題点を見出し、併せて印刷メディアと放送メディアの効果的な関係を探ることが研究会の目的であった。

開発の対象としてとりあげたのは、『日本政治思想』(主任講師：松沢弘陽、「社会と経済」専門科目、ラジオ、2単位)である。明治の啓蒙思想から大正デモクラシーにいたる近代日本の政治思想の歴史を対象とするもので、「思想」という抽象度の高い概念を学習内容とする点に科目の著しい特性があった。

研究会は主任講師・主査の間で組織され、ほぼ1年間にわたり討議が重ねられ、並行して教材作成が進められた。研究会は二つに分かれて行われた。一つは印刷教材の内容にかんするもので、放送大学教材作成部会の援助を受け、主任講師の本務地(札幌)で開かれた(参加者名については、印刷教材「まえがき」参照)。いま一つは放送教材の作成方針まで含む全体研究会で、放送教育開発センター、放送大学学園東京連絡所において、計5回開催された。

全体研究会は、主任講師主導の下に進められた。主任講師から基本的な構想が提示され、遠隔教育の視点から他の参加者がアドバイスをを行い、さらに提起された問題点について逐一検討を加えるという形で進行した。両種教材の作成にかんする権限・責任が主任講師に存する以上、当然の役割分担であったといえる。したがって、予め明確な方法論、作業枠組みを設定してから研究会が発足したわけではなく、この点、諸外国によくみられるコースチームの方式とは異なる。したがって、作業を重ねる過程で新たな問題点が次々に現われ、拡がり、発展して、あるべき教材作成の方法論につながることも多く、その成果は両種教材の中に生かされたといえよう。その主要点については、別稿「音声による印刷メディアの活性化」を参照されたい。

(3) 当面の課題

(1)でも述べたように、放送大学の場合、放送授業に使用される時間が諸外国の例に比して著しく大きい。また逆に、印刷教材の分量は、2単位科目の場合、A5版100~120頁(講義1回分が7~8頁)と、比較的小さい。この点から、印刷・放送両教材の相互関連を考える場合に、諸外国ではみられない特異な問題点が生じてくる。

一つは、印刷教材の書き方にかんする問題である。テレビあるいはラジオによる放送(一方向)が教室講義(双方向)と重なると考えられやすく、その結果、印刷教材の構成・記述方法も、講義の粗筋をまとめた概説・講義案タイプが圧倒的に多くなる。通常の通学制大学におけ

る教科書とほとんど差違がみられない。教師・学友との接触の少ない、「孤立した」学習環境にある学生たちにとっては、「印刷教材は、それだけで理解できるものでなくてはならない。つまり、学生は、他人の援助なしに、完全にテキストを通じて学習できなくてはならないのである」(Fern Universität「印刷教材作成のガイドライン」)。そのためには、通常の教科書以上に、学習心理学的・教育工学的見地からする「教育的」配慮が求められる。遠隔教育の教材には「自学自習」を援けるさまざまな編集上の工夫が必要とされるのである。(諸外国では、ほとんどの場合、講師向けの詳細な教材作成マニュアルが用意されている。)

いま一つは、上の記述と表裏の関係にあると思われるが、講義方法にかんする問題である。放送授業1回分の45分は、対応する印刷教材の分量(前述したように、標準的な場合には、A5版7～8頁であるが、かなりオーバーする例が多い)の読み上げに、若干の補足説明等を加えた時間にほぼ匹敵する。そこから生じやすいのが印刷教材の「棒読み」の問題である。放送大学の放送授業に対する批判点のうち、とりわけ多いのが「棒読み」授業にかんするもので、その多くはラジオ科目と推測される。学生に対するアンケート調査の回答から1例を掲げてみよう。

「印刷教材の朗読のような型ではつまりません。印刷教材をさらに肉づけするような、あるいは深く説明するような放送教材なら受講しなければ困ると一生懸命に聞くでしょうが、聴いても聴かなくてもテキストを読めばいいような放送では聴かなくなってしまう。」(大塚雄作他『遠隔高等教育の学習者像』1987)

因みに、1985年に開講された先行科目『政治思想Ⅰ』、『政治思想Ⅱ』(いずれも、ラジオ科目)の放送教材は、いずれも印刷教材の記述を口語的に言い換え、その上にやや詳しい事実の説明を加えるという方法をとっている。講師の肉声は聴けるが、複数のメディアの特性を生かした講義とはいえず、ほとんど「棒読み」そのものといった内容であった。

学問分野、科目の性格、使用メディア、さらに講師の工夫により、両教材の在り方、相互関係は多様でありうるが、上に述べた諸点は、放送大学の教材改善を試みる場合、常に考慮すべき課題であると思われた。

2. 研究会の経緯

『日本政治思想』の教材制作過程をセンターの研究プロジェクト「印刷教材の研究開発」に組み入れる構想の申入れは、昭和62年12月中旬、主査(多田)より主任講師(松沢)に対してなされた(参考資料として、多田「印刷教材の形態比較：研究班討議資料」を講師宛て送付)。その後、印刷・放送両教材のあり方、相互関係、進行スケジュール、協力体制等について、書面あるいは面談により連絡が重ねられた。その結果、3月中旬には研究会体制の基本的な枠組が合意され、1で述べたように、印刷教材の内容にかんしては放送大学教材作成部会の援助を受けて札幌で、全体計画にかんしてはセンター(あるいは東京連絡所)で、それぞれ研究会を開催することとなった。

以下、研究会で行なわれた討議内容の概略と、研究会と研究会の合間になされた主な作業を列挙し、併せて問題点にもふれることとする。

<第1回>

- ・日時：昭和63年4月25日10.00～12.00
- ・場所：研究図書資料棟2階小会議室

経緯と研究会の目的とについて主査より説明。教材完成までの時間的制約と、そういった状況下で可能かつ有効な議論・作業について参加者の意見を求めた。

議題として次の3点が主任講師より提出された。

- (1) 受講生の予備知識、関心をどのように想定すべきか。また、それに対して語る、狙い、視点など。
- (2) (1)の手がかりとして、講義第1回「序論」素案の検討。
- (3) 今後の進め方。

(1)は教材制作の基本にかんする議題であり、高校社会科教科書、放送大学の既設類似科目との比較・関連など、難易度にかんする検討がなされた。また単なる知識伝達型教材ではなく、政治的な物の考え方に主眼をおくこと。思想家の文章の抜粋をできるだけ多く収載すること。そのために平均的受講生の想定について議論が集中した。結論として「42歳、高卒、家庭の主婦、現実の政治に関心あり好学心に富む」という想定がなされた。

(2)については、講義の目的を明らかにする「序論」の梗概と、その意図を裏づける資料として、K. ウォルフレン、中江兆民、河上肇、石橋湛山、大山郁夫、吉野作造らの著作の一部抜粋が示され、講義の基本目標が説明された。さらに現代との関連への留意、ラジオ番組との関連について議論がなされた。

(3) 63年6月末までに、印刷教材の枠組み・内容とラジオ番組の関連について方針を決める。9月末までに番組制作に必要な諸資料を収集する。11月末までに印刷教材の原稿を完成する。

(主任講師より、同時代の歴史的背景を扱った関連教材の有無を問われたが、適切なものは見出せなかった。その代替として、同時期に開講が予定される『日本政治史——外交と権力』、『憲法概論』の校正刷をそれぞれ主任講師の了承を得て随時参照することとした。

さらに、既設の関連科目(『政治思想Ⅰ』、『政治思想Ⅱ』、『日本の政治』、『政治史Ⅰ』、『政治史Ⅱ』、『現代の政治生活』)について、それまでに行なわれた通信指導課題、単位認定試験問題が参考資料として求められた。)

<第2回>

- ・日時：昭和63年6月23日13.30～16.00
- ・場所：研究図書資料棟2階小会議室

前回研究会における討議、さらにその後開かれた教材作成部会(札幌)での検討結果もふまえ、主任講師より検討事項が示された。以下にその全文を掲げる。

『日本政治思想』検討事項

[1]全体を通じるねらい

(「まえがき」「第1回」を通じて)

1. 戦後民主主義と日本国憲法の先行者たち
2. その時代、人と生涯（政治および思想とのかかわり方）、思想と著作
- 3-a.<政治の貧困>と政治の世界における<哲学の貧困>を衝く
 - <事実>（個別利益のバラマキ、法による強制）の力による支配
 - <事実>をこえ、<事実>をしばる<哲学>の貧困
 - <貧困な哲学>に対して政治の<哲学>をきずくことによって戦う
- 3-b.政治の<哲学> 私と公、個と全体；利と義；立憲制・議会制を支える法以前の原理
4. これら過去の先行者たちの思想を学ぶ意味
 - 現代と歴史との対話（国際化の時代における豊かな経済と貧しい政治）
 - 思想における「進歩」と「陳腐」

[2]印刷教材・放送の形態、両者の関連

1. 印刷教材
 - a. 写真、図、マンガ（歴史的）、歌曲の詞・楽譜（?）
 - b. はじめに全 15 回の構成・見通しについて説明
 - 終わりに結び。全体として何を学ぶか
 - 各章ごとに、狙い、全体との関連、まとめ
 - 各章・各節の表題とサブタイトル、小見出しに工夫
 - c. 各時代の個性を現代人にわかりやすくする（e.g. 参政権、生活水準など）
 - 儒教の影響、大日本帝国憲法——他の講義との関係について
 - d. テーマをしばる
 - e. 明治・大正の歴史が今日にも通じる意味をもっていること
 - f. 文献——高校教科書、他の講義の教材、基本的なリファレンス
 - g. 楽しむこと——テレビ、映画、文学作品、<思想史を歩く>（e.g. 福沢、蘇峰、田中正造、吉野作造）
 - h. 組み方 余白をとる
2. 放送
 - a. 印刷教材を予め読んでおいてもらう
 - b. 時代を現わす演歌（自由民権）、流行歌、労働歌など（cf. 添田知道『演歌の明治大正史』）
 - ・引用史料の朗読
 - ・質問と答え（同席?）
 - c. 印刷教材の要所の説明
 - ・放送用の原稿、脚本（?）
3. 両者の関連
 - 印刷教材先行（?）

〔3〕章・節の編成と15回への配当

1. 章・節の編成と放送回との関係 (eg. 中江兆民の場合)
各回ごとに一応のまとまりをもたす
- 2-a. 全体を政治の＜哲学＞の共通主題で貫いていく
- 2-b. 個々の人物間の影響関係、意味連関に注意する (eg. 田中正造、河上肇)
- 2-c. 対比によって問題を浮きぼりにする (eg. 2章1節、2章2節と3節、3章、4章、5章)

〔4〕全体篇別案 (章と節)

放送 回	
I	序論
II	第1章 明治啓蒙思想と福沢諭吉 §1. 国民国家の形成と明治啓蒙思想 §2. 福沢諭吉 —— 「政治の診療医」
III	§3. 福沢諭吉の思想 —— 「一身独立」と「一国の独立」のジレンマ
IV	第2章 自由民権論の政治思想 §1. 明治啓蒙の継承と反逆 §2. 植木枝盛
V	§3. 中江兆民
VI	第3章 明治20年代の政治思想 §1. 明治20年代序論 §2. 徳富蘇峰と「平民主義」
VII	§3. 中江兆民 —— 『三酔人経綸問答』とその後
VIII	§4. 陸羯南 —— 「国民主義」
IX	第4章 明治社会主義 —— 二つの道 §1. 日清日露の戦間期と明治社会主義 §2. 「志士仁人」的社會主義者
X	§3. 「親方職人」の社会主義 §4. 「議会政策」論争と「大逆事件」
XI	第5章 田中正造 —— 土着の自然法と立憲主義 §1. 生涯 —— 村から出て「村に帰る」 §2. 政治思想 —— 「自治」「人権」から非軍備の模範国まで
XII	第6章 大正デモクラシーの二つの道 §1. 大正デモクラシー序論 §2. 吉野作造 —— その生涯

XIII	§ 3. 吉野作造の政治思想 —— 「板挿みになって居るデモクラシーの為に」
XIV	§ 4. 河上肇 —— 帝大教授となった求道の志士
XV	§ 5. 河上肇の政治思想
	§ 6. 吉野の道と河上の道 —— むすびに代えて

(上掲の一覧表には、講義の狙い、両種教材の性格・内容、相互関連といった遠隔多媒体教育において考慮すべき問題点が洩れなく含まれている。本計画の基本的な枠組みは、この時点ではほとんど確定したともいえる。)

<第3回>

- ・ 日時：昭和 63 年 9 月 13 日 13.00～15.00
- ・ 場所：研究図書資料棟 2 階小会議室

印刷メディア、放送メディアとも、政治思想という抽象度の高い学問にいかにとつつきやすく近づいてもらうか、に焦点をおいて議論がなされた。主任講師から提起された具体案は次の通り。印刷教材については、

- (a) 時代背景を表わす政治的調刺漫画の選択方針と収集方法。
- (b) 本文でとりあげる政治思想家すべての肖像写真の案と所蔵源、掲載許可の方法など。
- (c) 学習者の興味を刺激する参考文献の工夫。

放送教材については、

- (d) 各章ごとに一つずつ、当該時期を象徴する政治演歌を挿入したい。そのための歌詞の選択、楽譜の確認。
- (e) 本文中に引用する資料原文の朗読を専門家に依頼する。

(a)については東京大学法学部明治新聞雑誌文庫を利用する。(b)は掲載された図書の出版社(さらに著作権者)の許可を求める((a)(b)ともに放送大学教育振興会を通す)。(d)については主任講師よりいくつかの候補作品が示され、歌詞は印刷教材巻末に収録することになった(後、当該章末に変更)。歌い手と解説者の選任は担当ディレクターに委ねられた。(e)については、「山本安英の会」による兆民『三酔人経綸問答』の吹込利用などが示唆された。

また、当日は放送大学教育振興会の編集担当者の出席を求め、印刷教材の構成、図版の扱い、スケジュール等、編集作業の主要点について検討が行われた。

<第4回>

- ・ 日時：昭和 63 年 12 月 15 日 14.00～17.00
- ・ 場所：放送大学学園東京連絡所

印刷教材と放送教材の結び目となる演歌、労働歌、資料原文の扱いについて討議がなされた。主な論点は次の通り。

- (a) 収録する演歌・労働歌の決定。

全歌詞の中、どの部分を取りあげるか、番組中のどういう個所に挿入するか、放送に要

する時間、解説の方法と所要時間など。

(b) 主任講師による講義内容と演歌・労働歌解説との分担関係。

(c) 資料原文の朗読部分の決定。

(a)(c)にかんして、主任講師より、次のような原案が提出された。

放送回	歌曲	朗読
1	?	?
2		『福翁自伝』?
3		『文明論之概略』?
4	民権がぞへ歌、よしや武士	
5		<i>Contrat Social</i> , 『民約訳解』
6	帝国議会の歌、代議士	
7		『三酔人経綸問答』レーゼドラマ
8	無茶苦茶節	
9	あゝわからない	
10	社会党ラッパ節	
11		?
12	デモクラシーの歌(A)*、(B)*	
13	労働問題の歌*	
14	メーデーの歌(聞け万国の労働者)*	
15		?

(?印はこれから入れることを考える。*印は未選稿のもの)

議題の性格上、解説者に決定した作曲家竹田由彦氏の出席を求めて討議が行われた。歌詞・楽譜の確認・収集等について検討した他、「民権かぞへ歌」「よしや武士」については、高知市での録音が決定。また、竹田氏の推薦により、演歌の歌手として福岡詩二氏（東京演芸協会会員）が決定した。

資料の朗読部分中、第1回と最終回はいずれも中江兆民の文章から、第11回は田中正造の直訴状を採ることになった。また、講義全体の導入部として、第1回にオランダのジャーナリスト、K. ウォルフレン氏と主任講師の対談を組み入れる案が検討された。

(資料朗読の方法については、長年、専門家（舞台俳優、声優、アナウンサーら）に対して指導を重ねてこられた江藤文夫氏より協力の申し出があり、全面的に指導を仰ぐことになった。朗読者の選定、リハーサル、録音時の指導等、すべて氏の指示によった。その成果と意味については、別稿「音声による印刷メディアの活性化」を参照されたい。)

<第5回>

・日時：平成元年1月21日 14.00～17.00

・場所：放送大学学園東京連絡所

印刷教材の「序論」執筆、放送第1回における対談の準備のため、K. ウォルフレン氏、主任講師、主査の間で予備討議を行った。討議はウォルフレン氏の既発表論文（「日本問題」「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追従するのか」、いずれも『中央公論』所収）と近刊予定の英文図書“*The Enigma of Japanese Power*”（マクミラン社）の校正刷にもとづき、主として主任講師の質問にウォルフレン氏が答える形で進められた。なお、放送番組もほぼ同様の形式（英語による質問・応答）で行い、同時通訳を使って日本語訳を重ねることが合意された。

以上が、年度内に開かれた研究会における討議の要点である。

放送大学教務関係資料集所収の「印刷教材執筆要領」によると、本科目の印刷教材の標準的な脱稿時期は昭和63年3月となるが、実際に本文が脱稿されたのは、平成元年1月下旬であった。本研究会が関与することになり、放送教材との関連から構想し直すことが余儀なくされた結果、実際の執筆開始は第2回研究会後にまで繰り下がったものと思われる。全15回分の執筆進度は、9月末までに5回分、12月中旬までに10回分、1月中旬までに13回分、同月末までに全15回分となっている。執筆は、2→15、1、序論、の順序でなされた。

政治漫画、肖像写真の手配が東京側（放送大学教育振興会も含む）でなされた他、印刷教材の内容にかんする検討はすべて放送大学教材作成部会の援助により、札幌で行われた。

放送教材にかんしては、ウォルフレン氏との対談（3月22日）を除き、講義収録前にすべての資料録音（演歌・労働歌とその解説、資料原文の朗読）を終え、主任講師の試聴を経ることができた。また、印刷教材校正刷の出校が順調に進んだので、講義吹込みにさいし、講師は全体構成、記述の相互関係等を正確に指示することが可能になった。

上記のごとき過程を経て、両教材ともに年度内ギリギリに完成にいたった。印刷教材の分量は総計222頁と標準を大幅に超過することになったが、思想家の原文を多く収載する方針を採り、さらに漫画、写真、演歌等の歌詞まで収録したので、止むをえない結果と思われた。

主任講師の研究会への出席の他、打合せのため主査が2度札幌に赴いたが、その他の連絡はすべて書簡と電話によった。両教材の作成に関連する人員が多いことと重なり、円滑な進行が危惧されたが、きわめて順調に推移したのは幸であった。